

大平晃久 編著

『古地図で楽しむ長崎』

風媒社 2020年10月 165頁 1,600円+税

本書は、風媒社の「街歩き歴史歩き」シリーズとして定評の「古地図で楽しむ」長崎版であり、著述の大半は近現代長崎の地誌研究に長年携わってきた編者・大平晃久の尽力に拠るものである。本書はプロローグを含めて全32章から成るが、大平はその21章（と2つのコラム）を執筆し、残り11章の叙述を、吉良史明、山村亜希、上島智史、畑中芳恵、深見聡、今里悟之で分け合う。

本書は、「プロローグ」と3つのパートの本編で構成されるが、この「プロローグ」は、現・長崎県域の時間軸・空間軸の範疇を読者へ位置づけるために、重要な役割を果たしている。前期倭寇の時代の中国において五島列島の存在感が大きく描かれた『籌海圖編』(12頁)、近世の「四つの口」のうち、対馬から朝鮮への経路、および長崎から中国・東南アジア・インドを経てオランダへの道のりが描かれた「日本海山潮陸図」(13頁)という2つの古地図からは、現在の長崎県域が日本列島の辺境に位置しながら、異国と最も近接した玄関にあったことが把握できる。「プロローグ」でいまひとつ重要なのは、対馬・壱岐の長崎編入過程である。『改置府県概評』(14頁)には、そのプロセスが地図上に可視化されている。

「プロローグ」に続いて、本書は、次の3パートで構成される。

Part1 近世の長崎とその周辺

Part2 近代の長崎とその周辺

Part3 戦後の長崎とその周辺

各々のパートは2つに分けられ、その前半で長崎市内、後半で長崎市以外を扱っている。さらに、長崎市以外の各章は、県の南部から北部へ、そして五島、壱岐、対馬の順に配列されている。

「Part1 近世の長崎とその周辺」は14章立てで、大平は8章をかけて、近世長崎の城塞都市・港湾警備・街道、潜伏キリシタン集落と移住先だった外海・上五島、諫早湾の干拓、大村・平戸・五島福江島の城下町を紹介する。「肥前長崎図」(18-19頁)で、18世紀初頭に創建された大徳

寺が唐船主からの寄進で栄えた点、「鎖国」直後のポルトガル使節入港時の状況を描いた「長崎港内図」などは、近世日本外交史の研究書と併せて眺めると良い¹⁾。また、新地蔵の「周囲の石垣の遺構がホテルJALシティのロビーに展示されている」(21頁)という文章に代表されるように、本書では古地図の鑑賞だけでなく、現地情報を余すところなく提供している。そういう情報があるだけで、読者はいまず長崎を訪問したくなるに違いない。そのために、著者たちが史跡の現場まで足を運び、自ら写真を撮影してくる努力が、随所に伺える。

平戸に関しても、通史的な理解では、オランダ東インド会社が商館を開設した1609-41年という時期に注目が集まるが、大平は、平戸が中世以来松浦氏の拠点、倭寇の中心地だった事実を強調する。とくに五峯王直ごほうおうちよくの活動について、種子島へのポルトガル人來航の立役者だっただけでなく、五島福江にも拠点を置きながら東シナ海を支配した点は、長崎を中心として海域から古地図で楽しむ重要な要素だといえる²⁾。

残り6章のうち、吉良は、本居文庫蔵の「長崎諏方社図」(32-33頁)から、国学者に異国趣味の和歌が詠まれた背景を読み解いている。長崎の国学者・中島広足ひろたりが詠んだ異国趣味の和歌を、紀州在住の国学者・本居大平もとおりおおひらが添削する際、長崎を題材とした歌文を読み解くための手がかりとして、この絵図を広足たちから贈られたとされる。長崎に不案内な者に対して、「地図を紐解く必要」(35頁)を説くのは、著者として同じ気持ちであろう。

山村の担当は、島原半島に関する2章である。その前半では、島原半島の各城郭と港町との関係性を地形図から迫り、後半では1792(寛政4)年の「島原大變」と呼ばれる雲仙岳の噴火と眉山の山体崩壊の被害を地図と景観から読み解いた。とくに、「[大變]前の島原城下町復原」(49頁)は、現代の都市計画図に古地図の街路や情報を重ね合わせた点で、自ら作成して地図を楽しむ意義を読者に与えている。また、「肥前国嶋原津波之絵図」(52-53頁)は、「大變」以前の城下町図に、変化した部分を合印で重ねた絵図である。どちらの図にも、レイヤー機能が活かされた時系列の効果が発揮されている。

上島は、近世壱岐の捕鯨村落の風景、対馬の城

下町の特徴を紐解くとともに、絵図から天道信仰の可視化を試みた。壱岐の勝本浦と対馬の府中には、朝鮮通信使の滞在地という共通点があるだけに、その旅程を連続的に描いたら、壱岐・対馬の地誌的関係性をより明確にできただろう。「朝鮮通信使に関する記録」が、2017(平成29)年にユネスコ「世界の記憶」に登録されただけに、それに対する読者の関心も高かったかもしれない。

他方、対馬固有の天道信仰は、社殿のような建物を持たず、山岳・森林・川渕を聖域とするゆえに、地形図上で表現されにくい。ここでは、近世の絵図からその場所を特定するとともに、聖域としての記憶を継承する難しさを訴えている。

「Part2 近代の長崎とその周辺」は9章立てで、幕末維新の外国人居留地、稲佐の「ロシア村」、長崎の軍事都市性、国際リゾートとしての雲仙、軍港都市としての佐世保、北松浦半島の鉄道と炭鉱業などの6章を、大平が語る。明治期における出島の行く末にも焦点を当てているのは、本学会共通課題における大平研究の成果でもあろう³⁾。長崎の近代史におけるロシアのプレゼンスは大きく(95頁)、本書で紹介された稲佐の「ロシア村」や雲仙のホテル以外にも、たとえば亀甲細工が長崎港に上陸したロシア人に店頭販売もしくは戦艦で売り込まれていた⁴⁾。他方で開港は、コレラ、赤痢、腸チフスなど経口感染症の蔓延を引き起こし、近代上水・下水の建設が急がれた。こうした都市公衆衛生の整備を地図で可視化することも、本書ではできなかったかもしれない。

軍港都市佐世保や北松炭田の歴史に関しては、北澤編(2018)の内容と重複する点も少なくない⁵⁾。ただし、北澤編は近代日本経済史の立場から、主に統計資料を使用して実証を試みた分、地図から紐解く空間利用の検討を割愛しているので、本書はその補完的役割を十分に果たしている。

畑中の「近代長崎の文学——地図で迎えるゆかりの地」は、これまで長崎という舞台を文字だけで伝えてきた文学作品に対し、言語以外の表象である地図と連繫させた点で、斬新な章となった。1章8ページには数多くの文学作品が登場するが、それらはけっして離々たる存在ではなく、1つの物語として成立している。軍艦島・伊王島の産炭地を担当した深見の章は、地形図から炭鉱業の遺跡を探るだけでなく、観光学の立場からその現況

と課題を主張している。このタッチは、Part3で担当した五島列島の各章にも該当している。今里は、世界遺産「長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産」のうち、「平戸の聖地と集落」の構成資産を明治期の村図から考察した。ここでの特徴は、現在でも旧平戸藩領に残る「免^{めん}」という行政単位の存在である。「免図」(134頁)からキリシタン集落ならではの特徴を見出しがたいが、「土地の歴史を深く知ることで、より豊かな地図の読み方ができる」(135頁)というメッセージを読者に宛てている。

「Part3 戦後の長崎とその周辺」は8章立てで、大平が6章、深見が前述の2章を担当している。戦後長崎における最大のトピックは、原爆投下後の復興過程にある。1946(昭和21)年に出版された「長崎市街案内図」(139頁)では、被災地と戦時中の建物疎開地が黄色く塗られ、1953年刊行の「パノラマ式長崎観光案内図」(144頁)には爆心地に原爆のキノコ雲が描かれていた。双方の地図からは、正確な地理情報を書き記すだけが地図の役割ではないという了解的な側面が滲み出ている。原爆の惨状に関しては長崎原爆資料館や浦上地区の「長崎原爆遺跡」で学べるが、長崎中心部でも、新興善国民学校跡地に建てられた市立図書館内に「救護所メモリアル」として、当時の教室が再現されている(138頁)。こうした旅行雑誌では見出しづらい施設の紹介こそ、本書出版の意義だといえる。

ちなみに、同じページに「市役所から東に降りる急坂の専用軌道部分^④は勝山市場になって残っている」とあるが、勝山市場は今日、マンション建設のために取り壊されている。とはいえ、Googleマップのストリートビューには、以前の入口が映し出されているので、いまやそれ自体も「古地図」と化している点で興味深い^{にしはまのまち}。西浜町一思案橋間の春雨通りが、復興期にヤミ市のバラック街として利用されたことも、今となっては語り伝えて記憶に残していくしかない。

「戦後の佐世保——アメリカ海軍、ハウステンボス」の章では、郊外の針尾を語る節が秀逸であった。大平は、針尾の変化を把握するために、5万分の1地形図を1945年、1977年、1997年と並べ、戦時中に設置された針尾海兵団を「定点観測」した。その結果、この跡地は、終戦直後に引

揚・復員者施設、かつ帰国する中国人・朝鮮人の収容・送還地として用いられ、続いて警察予備隊の駐屯地、陸上自衛隊の演習場として利用された。さらに、この土地には、1960年代末期から工業団地計画が持ち上がるが、用地売却が進まなかったため、その活用策として、1987年に長崎オランダ村がこれを全面使用し、5年後にハウステンボスを開業させたことを、読者に知らしめている。今日ハウステンボスを訪れても、その空間は「もはや戦後ではな」く、近隣に引揚記念館や身元不明戦争犠牲者の釜墓地が存在するのみだが、古地図が存在することで、この地はいつまでも「いまだ戦後である」と語り継がれてゆくことが可能となる。

このように、本書は、書名を「古地図で楽しむ長崎」とするが、対象年代は近世から戦後に及び、対象空間は、長崎市内に留まらず、島原・西彼杵^{そのま}・北松浦の各半島、五島・壱岐・対馬の島嶼部まで、長崎県全域を網羅した力作である。そして、そこには編者のある願いが込められているのではないかと想像される。というのも、編者は別稿にて歴史遺産の復元整備を検討する際、「ある特定の時代への復元によって他の時代の要素が排除されること」を問題視し、「特定の記憶を選び出し、記憶の重層を否定して場所の意味を単純化する」計画を強く批判している⁶⁾。この主張に基づくならば、本書においても特定の時代、特定の場所だけで長崎の古地図を楽しむと、長崎が持つ土地の記憶を、完全には掘り起こせなかっただろう。

ただし、そうであるがために、読者に対して本書の理解をいささか難しくしてしまった点を否定できない。そのひとつとして、長崎県域全体の土地感覚や地理情報にかなり詳しくないと、長崎から見れば辺境に位置する本州の居住者は、正確な読み方や場所を確認するだけでも、時間を要してしまう。たとえば、時津^{ときづ}、外海^{とがうみ}、彼杵^{かまき}、北松^{きたまつ}、厳原^{いづはら}などを、長崎県にゆかりのない読者は、ふりがな無しで読むことができるだろうか。池島、相浦、福江などのロケーションを、読書前に把握できているだろうか。そうした隔靴搔痒の感を拭うためにも、「本書の関連地図」(6-7頁)が用意されているはずなのだが、ここに本文中のページ番号が書かれていないために、本編の各章とこの関

連地図とを直接リンクさせられず、非常に読みづらかった。

いまひとつの難解点は、本書の構成にある。冒頭で述べたとおり、本書は、近世、近代、戦後という3つのパートで構成されており、各パートの前後半は長崎市内、長崎市以外と島嶼部で分かれている。同じ風媒社の「地図で楽しむ」横浜編の書評で、評者は同一の場所、同一の事項を説明するのであれば、「構成のせいで、連続する時空間を分断させる」のではなく、「通時的かつ時代順で紹介したほうがわかりやすい」と批評した⁷⁾。この批評に照らし合わせるならば、本書はまず3つのパートを時系列で通したといえる。

問題は、横浜編と長崎編とでは、対象となる空間領域があまり違いすぎるといえる点だ。横浜編の場合、たとえ横浜市以外である鎌倉・川崎・横須賀・三浦半島の章があったとしても、それらは横浜市の隣接地域であり、交通アクセスや産業経済の面で横浜と直結している周辺部だといえる。したがって、横浜市以外の神奈川県内を対象空間としても、それは横浜の地図として理解できる。

しかし、本書の場合、長崎市域と長崎市以外の地域との間には、直接的な関係性を見出し難い。したがって、長崎市内を語る各章の間には、話の繋がりがある程度見られるものの、佐世保に関する2章は30ページ以上、平戸や五島の章同士はそれ以上に離れてしまったことで、土地の記憶が長期時系列的に表現されにくい。

とくに、Part1の「潜伏キリシタン集落と移住——外海・上五島」(36-39頁)、Part2の「東のカトリックと西のキリシタン——明治の村図に見る平戸島の集落」(129-135頁)、Part3の「世界遺産となった島——野崎島と奈留島」(160-161頁)は、世界遺産「長崎と天草の潜伏キリシタン関連遺産」の構成資産として、近世から現代まで記憶が繋がっているだけに、それらを近世・近代・戦後の時間軸で区切った結果、それぞれの章が孤立してしまったのは、非常に口惜しい。近年登録された日本の世界文化遺産は、シリアル・ノミネーションという新規性を重要視してきた。すなわち、地理的な連続性はなくても、歴史的な関連性や連続性のある複数の遺産をひとつのまとまりとして関連づけ、全体で顕著な普遍的価値を所有するものとして、世界遺産に推薦されている⁸⁾。昨

今のこうした概念を踏まえると、本書の場合、まず3つのパートを、県南の「長崎市内・諫早・島原半島」、県北の「佐世保・池島・北松」、主に島嶼部の「外海・平戸・五島・壱岐・対馬」と分け、県南のパートでは近世から戦後に至る都市史を、県北のパートでは近代から戦後までの軍事史・産業史を、島嶼部のパートでは近世から近代を経て現代へと続くキリシタン史・宗教史をそれぞれ中心的なテーマとしながら、古地図を楽しむという方法もあったのではないかと提案できる。

本書に「おわりに」の紙幅は用意されていないが、もしあったとすれば、古地図から長崎の何を楽しめたといえるのだろうか。そのひとつとして、戦前期における軍事・行政施設が戦後に文教・スポーツ目的で利用されるという意義が、挙がるだろう。北村西望作の平和祈念像は、長崎刑務所浦上刑務支所跡地に建てられているが、ここに設置されたのがまったくの偶然だったのは、「原爆のモニュメント——爆心地と平和公園」(145頁)にあるとおりである。平和祈念像が大型化したうえに、本来、刑務支所跡地には体育館とプールの建設が構想されていたが、その構想が遅れたゆえの産物だった。他方、同じ浦上地区の西側には、明治末期に陸軍重砲兵大隊の兵舎・練兵場・射撃場などが存在していたが、現在、兵舎の区画は長崎西高校に、練兵場跡地は活水中学・高校に、射撃場は市営住宅や長崎大学の留学生宿舎になっている。

また、佐世保の西の郊外に位置し、佐世保第二海兵団(のち相浦海兵団)が設けられていた相浦では、戦時体制下で「新興工業都市計画」が施行され、緑地帯・防火用水路・防空壕をともなった「防火道路」が設計された。この壮大な都市計画が成された区画には今日、長崎県立大学佐世保校や佐世保市総合グラウンドなどが築かれている。同校がなぜ佐世保市中心部からは遠い場所に建設されたのか、一度訪問してみて疑問に思っていたが、それは相浦の土地利用史を知ることによって解決できたわけである。こうした学校やスポーツ施設などを日常的に利用する若者世代に対し、その土地には何がかつて存在していたのか、伝えていくこ

とは、いま大人の宿命として重く課されている。

いまひとつは、最近の長崎駅についてである。本年9月23日に、西九州新幹線の武雄温泉—長崎間が開業した。これにあわせて、長崎駅は2年前に高架化され、西側約150メートルの車両基地だった場所に移転した。しかし、駅が移転した分だけ、現行の路線バスや路面電車の乗り場との距離が大幅に遠くなって、乗り継ぎが不便になる問題が発生している⁹⁾。現在、旧駅跡地には駅ビルが建設され、東口の広場も整備される予定だが、こうした長崎駅周辺の変貌に関しても、今後作成される地図から楽しむことができよう。

(鷺崎俊太郎)

【注】

- 1) 松方冬子『オランダ風説書と近世日本』東京大学出版会、2007。彭浩『近世日清通商関係史』、東京大学出版会、2015。
- 2) 王直の活動に関しては、米谷均「後期倭寇から朝鮮侵略へ」(池享編『天下統一と朝鮮侵略』吉川弘文館、2003)、134-145頁に詳しい。
- 3) 大平晃久「長崎出島における復元整備の経緯と問題点」歴史地理学56-1、2014、21-31頁。
- 4) 農商務省商務局『各府県重要商品調査報告』第3冊、1911、133頁。長崎新聞、2020年7月17日、<https://www.nagasaki-np.co.jp/kijis/?kijiid=656727919234679905> (閲覧日2022年9月12日)。
- 5) 北澤満編『軍港都市史研究』V佐世保編、清文堂出版、2018。
- 6) 前掲3) 21、28頁。
- 7) 鷺崎俊太郎「書評 岡田直・吉崎雅規・武田周一郎著『地図で楽しむ横浜の近代』」歴史地理学63-2、2021、39頁。
- 8) 島津忠裕・鷺崎俊太郎「世界文化遺産登録に向けた鹿児島市の観光まちづくり」歴史地理学57-1、2015、73頁。
- 9) 長崎新聞、2021年4月25日、<https://www.nagasaki-np.co.jp/kijis/?kijiid=758874109314252800> (閲覧日2022年9月12日)。